フシギ人間　鈴木邦彦さん
― ピアノ・シャシンキ・野鳥の会

由紀子・齋藤・大熊

米国神経化学会の会長をつとめ、「遺伝性神経疾患、特にスフィンゴリピドーシスの病理機序に関する研究」で学士院賞を受賞した鈴木邦彦先輩。偉そうなところがまるでありません。あの特上の笑顔に、科哲の会でもうお会いできないのが、淋しくてなりません。2025 年 2 月 12 日に急逝してしまわれたのです。それも、お風呂の中で・・・

生化学者で科哲の先輩たちと縁の深い叔父の山川民夫と仲がよく、我が家ではクニさんと呼んでいたので、そう呼ばせていただきますね。

写真撮影が趣味。会合があれば、高性能でやたらに重いカメラ（クニさんによればシャシンキ）で写真を撮りまくり、それを大量に DVD に焼いては参加者に配るのでした。自然教育園と野鳥公園がお気に入りでした。生き物を観る感性の鋭さと共に高性能カメラの力も借り、芸術作品のような写真が出来上がっていきました。日本野鳥の会の長年のメンバーでしだが、鳥ばかりでなく昆虫や植物全般にも詳しく、多くの美しい写真が、主がいなくなった家に残されていました。その中から、アゲハ（写真２）とカワセミ（写真３）を皆さまに。

幼稚園時代からピアノに恋い焦がれ、2016 年の『科哲』17 号にはなんと、10 ページにわたってピアノへの思いが綴られています。2002 年に学士院賞を受賞したとき、近所迷惑にならないサイレントピアノを賞金で手に入れ、年賀状でも自慢しておられました。

90 をすぎ、電車で席を譲られても絶対に座らないことが自慢。横断歩道で信号が変わるのを待つよりも、歩道橋を探してスイスイと登るので同行している人々は付いていくのが大変でした。

飛び抜けて用心深いという一面もありました。自転車に乗ることがないにもかかわらず、歩くときは自転車用のヘルメットを愛用。ご自身の用心深さを楽しそうに自慢されていました。最後になった年賀状（写真１）に、そのヘルメット姿が残されています。

（写真１）

（写真２）

（写真３）

■ゆきこ　さいとう　おおくま

1963 年「科哲」卒。朝日新聞入社、科学部を経て 84 年論説委員。大阪大学大学院教授を経て、国際医療福祉大学大学院教授。著書に『「寝たきり老人」のいる国いない国』『日本を変えようとした 70 の社説＋α』『恋するようにボランティアを～優しき挑戦者たち』『物語・介護保険』ほか。近編著に『精神医療と認知症の＜闇＞に 9 人のジャーナリストが挑む』

（氏名は、ひとから呼ばれた順で、名刺もそうしています。夫婦別姓の実践篇です。学生時代は齋藤さんでした）